

第5回研究会

カワラヒワの地域個体群が利用する 京都府南部の里山・里地環境

信州大学名誉教授

中村 浩志

信州大学での研究に引き続き、私が京都大学大学院時代に京都市南部の桃山御陵から巨椋干拓にかけての地域でカワラヒワの研究を行なったのは、今から40年以上前です。その研究地を訪れ、研究成果を紹介することが企画され、2015年1月10日、龍谷大学里山学研究センターの第5回研究会として開催していただきました。この機会を与えていただき、またご参加いただいた多くの方に、まずお礼申し上げます。

当日の午前中、調査地の桃山御陵を案内させていただきました。午後には、龍谷大学深草学舎で1時間半にわたって講演させていただき、解明できたカワラヒワの生態についてお話ししました。また、翌日には桃山御陵周辺の宇治川や巨椋干拓を訪れました。

京都のカワラヒワは、桃山御陵など里山の林縁部を繁殖地とし、その周りの水田や畑、河原などを採食地にしています。ところが、繁殖を終えた夏から秋には繁殖地から全くいなくなり、この間、京都盆地一帯のカワラヒワは、宇治川や巨椋干拓に集合し大群をつくっていました。この集合は、換羽と密接に関係し、換羽のための移動集合でした。

10月繁殖地に戻ったカワラヒワは、桃山御陵の頂上部が枯れたスギに集まり、そこで行われる集団での誇示行動を通し、つがい形成が行われ、その年生まれの若鳥も加えて繁殖集団の再編成が行われていました。留鳥である京都のカワラヒワとは異なり、個体群の一部が冬に渡りをする長野県のカワラヒワでは、この集団誇示行動によるつがい形成と繁殖集団の再編成は、春先に行われていたのです。

京都では、留鳥のカワラヒワの他に、秋の終わってから翌年の春先にかけて渡りのカワラヒワが多数訪れます。9月までは、体の小さい京都のカワラヒワのみですが、10月に入ると体の大きな渡りのカワラヒワが見られます。しかし、真冬になるとこの大きなカワラヒワはみられなくなり、代わりに中間サイズの渡りのカワラヒワが多数越冬しています。3月に入り中間サイズがいなくなると、4月にかけて再び体の大きいカワラヒワが見られるようになりました。この間、京都のカワラヒワは、ずっと繁殖地である林縁部で生活していたのに対し、大型や中間サイズの渡りのカワラヒワは、留鳥が使っていない巨椋干拓地等の林縁から離れた盆地の真ん中の地域を使っており、両者は混じることなく、異なった場所で生活していたのです。

長野と京都の他、北海道、九州、沖縄にも調査に出かけました。その結果、九州からカムチャッカ半島に分布するコカワラヒワ、カラフトカワラヒワ、オオカワラヒワという3亜種は、

北のものほど体が大きいという連続的な変異でつながっていることがわかりました。また、東北以北で繁殖するカワラヒワは、冬には南に渡りますが、その場合、北で繁殖するものほど南に渡り、繁殖の南限を超えて沖縄で越冬しているカワラヒワは、最も北のカムチャッカ半島で繁殖するオオカワラヒワでした。これが、秋の終わりと春先に京都に立ち寄ったのです。さらに、京都で越冬しているカワラヒワは、体の大きさから東北や北海道で繁殖するカワラヒワでした。体の大きさの変異から、渡りのパターンも解明できたのです。

久しぶりに訪れた桃山御陵、カワラヒワの営巣木のアカマツが減り、頂上が枯れたスギはほとんどなくなりました。また、採食地となっていた林縁の畑や水田は宅地化が進み、一面の水田だった巨椋干拓地には町ができました。カワラヒワが住む里山環境はすっかり改変され、かつて京都盆地で繰り広げられていたこの鳥のダイナミックな季節移動や越冬集団との棲み分けは、今はどうなってしまったのだろうか。